＜書評リプライ＞

違和感の捉え方――書評に応えて

渡辺　拓也

記述的要素が高くページ数の多い調査研究に対して，その出来不出来はともかく，とりあえず敬意を表していることを示すのに「重厚なエスノグラフィー」とは便利な言い回しである．「長期におよぶ」「実直」「丹念な」なども，分析が甘いわりにいたずらに長い研究書に対する賛辞として使い勝手がよい．これらの真意は，最終的には読者自身がその対象書籍にあたって確かめねばならないだろう．評者の野村駿氏は，500ページを超すうえに，後になるほど話が細かく，ややこしくなる本書全体の構成と内容に，ていねいな解説を加えてくれた．また，研究書としての功績を2点にしぼり込み，論拠を明確にしたうえで，疑問点を提示してくれている．拙著に対して大変な時間と労力を費やして下さったのは明らかであり，自著を紹介する際にぜひとも読んでいただきたい貴重な書評を執筆いただき，感謝に堪えない．サブタイトルに「暮らしと仕事を記録する」とあるように，本書は，飯場の労働と生活の実態を明らかにする記述的な側面を持っている．しかし，記述的な側面だけでは一冊の本として成立しない．まさに記述そのものである「日記」からスタートし，記述を進めながら，本書は排除のメカニズムの検討へと議論を深めていく．本書の功績を，微視的なレベルにおける排除のメカニズムを検討した点，および，これをエピソード記述の方法論を援用し，「不当性の感覚」から検討した点にあるとしたうえで，この2点に対する疑問が野村から提示された．

1　社会的排除論の陥穽

野村が提示する疑問点の1つ目は排除概念の用い方に関するものである．排除を「参加の欠如」ととらえ，プロセスとして実態を把握しようとする「一般的な社会的排除論」との違いがわかりにくいとの指摘だ．野村が整理するように，本書は「カテゴリー化の実践」，すなわち「線引き実践の問題」として，排除をとらえようとしている．「排除する／される」という関係は非対称的なものであり，線を引く者と引かれる者とに分かたれる．そこに引かれた線がどのような意味を持つかには，いくつかのバリエーションが考えられる．

まず，「われわれ」と「やつら」を切り分ける境界線は絶対的なもので，「やつら」の侵入を決して許さない場合である．最初から参加させる気がない時に，その

場をやりすごすために実践される．この場合，排除行為は「参加の欠如」に直結したものと言えるだろう．次に，そこに引かれた線に対して，その線を越えるか越えないかを線を引かれる側の人間が迫られる場合である．拙著で扱った排除行為は，基本的にこちらの場面を扱った事例ということになる．「われわれとお前らは違うのか，同じなのか」「われわれに従うのか従わないのか」を暗に迫っている．その線を越えれば，本来はその線を引かれた側でありながら，その線を引く側に回ることになり，仮初めの自己が本来の自己を排除するような，歪んだ立ち位置におかれることになる．人びとのあいだにまとわりついてからめとる，そのような圧力を生み出すカテゴリー化の実践を，相互行為の視点から排除として読み解くのが本書の立場である．

「参加の欠如」であるのか，「統制の手段」および「通過儀礼」であるのかは，クリアに区分できるわけではない．無理をすれば，かろうじて参加を許される場合もあるだろうし，その余地がどの程度あるかを見極めること自体，容易ではない．ともあれ，そこにグラデーションがあることは確かである．「一般的な社会的排除論」における「参加の欠如」であってもそれは変わらない．本書のコラムでも触れているように「一般的な社会的排除論」は，包摂を目的とした社会政策的な色合いが強い．この議論では，排除の区分けにこだわるより，現に欠如している参加を実現することこそがゴールになる．集団への参加が可能になれば問題は解決したことになるのだから，排除の区分けは二次的な問題であり，曖昧なままでも構わないのである．ところが，ここに大きな問題が残る．

それが制度的なものであれ，実践的なものであれ，境界線の内にあるか外にあるかだけが問題であるなら，境界線の内側，つまり，その制度や集団の性質は問われない．何らかの属性を理由にある人の参加を拒むような制度や集団に対して，そのような選別を表向き撤廃させたとしても，それまで参加を拒んできたような利害関係の構造は温存され，潜在化して影響を及ぼし続けるのではないだろうか．相互行為の中で繰り返される排除の圧力に新たな参加者たちは耐えなければならない．排除の圧力に音を上げたり，嫌気がさしたりして，せっかく参加が可能となった場を去る者がいれば，改めて自己責任の論理で責められることになるだろう．すでに「参加の欠如」は乗り越えられているはずなのだから，「公的な支援を受けているくせに，努力する気がない」「根が怠け者なのだ」「甘えている」といった批難は，今度は妥当なものと見なされかねない．「一般的な社会的排除論」からは，こうしたメカニズムにフォーカスしにくい．そればかりか，社会的排除論自体が，例えば新自由主義や競争原理などによって生み出される矛盾や歪みを隠蔽し，マクロな排除の構造を下支えするものとして機能しかねない．

2 「類的同型性」を根拠とした推論

疑問点の2つ目は，「類的同型性」を根拠としつつ進められる，筆者の感情をもとにした推論のあり方についてである．まず確認しておかねばならないこととして，「類的同型性」を根拠とした推論は社会科学の共通基盤であり，本書に特徴的なものではない．対象者の語りが参照されていたとして，個別の豊かな語りが，豊かなままに労働者たちに共有されたものととらえられるわけではない．さまざまな豊かな語りの中から，共感的な理解が可能な範囲の共通する文脈を彫琢して分析につなげられるのが実際であろう．

野村は「怒鳴られながらの新人教育，指示の仕方の感じ悪さ，ダブルスタンダード的な状況に対する違和感」が，ほかの労働者に共有されているのかどうかに疑問を付している．しかし，ここで筆者が問題としているのは，このような状況そのものであって，「違和感」ではない．怒鳴られることも，指示の仕方に不足があることも，ダブルスタンダード的な状況におかれることも事実であって，その事実を関係性の文脈で考察する切り口として「違和感」が示されているにすぎない．

実は，第8章での「僕」の感情の記述は，後半4章の中では独特のものとなっている．第5章から第7章までは第8章ほどあけすけに「僕」の感情は書き込まれていない．感情の記述は「不当性の感覚」による分析を行うための起点であり，違和感がほかの労働者に共有されている程度の検証は，ここでは重要ではない．しかし，分析にかかわりの薄い記述が過度に書き込まれていれば，混乱をまねく危険がある．無駄な記述を長々と読まされる読者の身になっても控えるべきである．生活史のインタビューの語りを引用する際でも，このような取捨選択は行われているはずである．

それでも，本書のデータ部分に書き込まれた「僕」の感情のディテールは，一概に無駄なものとも言えない．読者は，その「違和感」に対して「類的同型性」を根拠とした推論が可能である．「違和感」に共感できるか否かを判断することは，筆者の解釈の妥当性を判断する基準ともなる．共感できなければできないで，なぜ共感できないのか，共感できない自分自身の「違和感」をもとに，読者は読者なりに考察することができる．したがって，「違和感」の表明は，解釈の妥当性を計る根拠として，議論を豊かにするものとも言えよう．また，3章にわたって事例が散りばめられているA・B・C建設と比べて，X建設は相対的にデータの記述が少ない．第8章は最終章でもあるし，文脈や雰囲気を理解する材料を読者に多めに提供したかった．

「調査者の主観を差し挟むべきではない」と教条主義的に考える学者ほど，議論の文脈より感情表現の派手さに目を引かれ，難色を示すだろう．行き過ぎだと感じられるような感情描写もあるかもしれない．読者には，むしろ「僕」の感じ方に対

して「違和感」を抱いてもらいたい．感情を見えないように装うことが科学なのではない．感じ方に依拠しなければ見えてこないこと，とらえられない構造があることを本書は問題としている．

エスノグラフィーは他者の文化・社会について記述するものである．ところが，本書では調査者である自己が中心に据えられている．エスノグラフィーと言うと，読み物としての面白さに魅力を期待される一方で，研究書としては理論的な抽象度の甘いものと見くびられかねない．「追体験可能」な構成は，読み物としての面白さを掻き立て，理解を助けたかもしれない．しかし，これは研究書としては副次的な効果である．本書の最後に述べたことを繰り返せば，固有の経験を通してでなければ排除の構造は見えてこない．面白さは，そこに掘り起こされるべき意味が宿っているからこそ面白い．エスノグラフィーであればこそとらえられるものを，本書はとらえようとしたつもりである．

大阪の寄せ場・釜ヶ崎は大きな時代的な転機を迎えている．飯場をテーマとした本書が刊行されること自体，寄せ場の変容を背景としている．現在進行中の「西成特区構想」によるあいりん地区のまちづくりは，あいりん地区が「普通の街」になることを社会問題の解決であるかのようにアピールしている．また，このまちづくりは地域の活力を基盤としたボトムアップ型のものであることも強調される．あいりん地区は日本全国で深刻化する地域の共通課題の解決において全国に先駆けて成果をあげつつあるモデルケースであるという．本来どこにも存在しないはずの「普通の街」の境界線が釜ヶ崎をめぐって引かれようとしている．